

# 【指診】



九谷六口

「先生、指診するんですか。嫌いなんですけど」  
「これが好きな人はいないよ。一応、前立腺も調べた方がいいからね」

三日前に高熱と腹部の痛み。それに頻尿と残尿感。刈谷は、十年ほど前に急性腎盂腎炎で二週間ほど入院した事があった。症状が似ている。

今、泌尿器科の診療室に下半身の下着を脱ぎ、ベッドの上で両膝を抱えて来るべき直腸内指診の覚悟を決めている。カーテンは引いてあるものの、隙間からチラチラと看護婦の顔が見えるのが気になる。向こうからも見えるはずだ。

「先生、い、痛いんですが。そんなに乱暴にしないでくださいよ」

「何処が痛いのかな」  
「穴の周りですよ」

「こっちはどうかね」

医者は、指先を動かしている。

「痛いのは、穴の周りだけです。まだですか」

医者が指を抜いた。

「言っても仕方ないですが、先生の指は太すぎるんじゃないですか」

医者は何も言わずにカルテに向かっている。

「炎症反応もあるし……腎盂腎炎ですね。それに前立腺も少し腫れている。一週間ほど入院した方が良いでしょう。点滴をしましょう。明日、支度をして来てください」

点滴と尿検査、それに指診の毎日が続く。

刈谷は、他人に見せてはいけないことがあると思っっている。欠伸もそうだ。トイレで欠伸をする時も口を手で押さえるようにしている。習慣付け

は大切である。電車の中などで口を大きく開け、みっともない顔で平気で欠伸をしたり、鼻毛を抜く輩などを見ると反吐がでそうになる。バケペソ面（お化けがペソを掻いているような顔）で化粧をする女などを見ると殴り倒したくなるほどだ。

さすがに指診が始まると看護婦は、カーテンを引き、顔を見せないようにしてくれる。これは、せめてもの救いである。しかし、この様な診察を受けなければならぬ自分を、哀れとまで思っている。他の方法はないのだろうか。十年前も同じ事を感じたが、これほど非人間的な行為はない。診察とは言え、毎回、屈辱感に襲われ、医者には憤りすら感じてしまう。

「大分、良くなったようですね。明日の診察で問題がなければ退院です」

やっと屈辱的な指診から開放される。刈谷は、ほっとした。そのためか、この夜はグッスリ眠ることができた。

清々しい朝。気持ちも軽やかに診察室に向かった。今日で指診も終る。そう思うと今まで感じていた屈辱感も消えていくような気分である。

いよいよ最後の指診が始まった。だが、刈谷は、徐々に奇妙な気持ちに襲われた。そして病院中に刈谷の叫び声が響き渡った。

「先生っ！ お願い。もっと、もっとッ！ もっと、激しく遣ってッ！」

(了)